

911.3

シ

4

士郎五七集

四

口笛集

蛤も茶も口笛く法りん

藤もけしれもそんきぬ月の珠

鳥鳴を千鳥の空はせん答て

土橋おくは氣をうりま

淋一さふたふり霧をほくと

昨四五もあつたをみり

山姥のあつくとあつたの上

下法をぬりて橋を通すは

を付法やうを教する柳子遊

竹有

士朗

沙鷗

月底

對我

青峨

朗

有

元美

大うけ此多き七夕の音
 芦の葉の月さやくと川風ふ
 新田の赤朱赤う 紫より
 望のまのたの 息を吐きて
 夢し 思ふの 妹より けの 雲
 うき人の 眠を 朝は 暁
 河をうら 涙の 赤風は 程
 陽の 肌を 鏡を 俤た 雲
 板戸の 飴のと ける 雲の 日
 焼草の 葉の ちを ぎを 相越
 おこす 雲の 伊か 雲の 去ら

永齋 大巢 底 夢 明 有 美 齋 巢

批七初下共

蚊ひよの 小たき 破し 濃雲 麻
 宵の 水鶏の 赤 雲 かり
 二人すて 今事 かり 赤 赤の 麓 赤
 ふやと 云 出 山 伏り 雲
 松風 やさす 小 峰の 持 不
 あろの たらぬ 朝 鳥の 雲
 杉ふし 小 雲の 雲 雲 雲
 神ふし 小 雲の 雲 雲
 雲 雲を 足 透 雲を 雲 雲
 うきよの 中を 雲の 雲 雲
 雲を 雲の 雲 雲 雲 雲

底 鷗 巢 齋 美 有 朗 峨 赤 底 鷗

花の戸口をひりく〜とあ〜
そくろをりるりふふむむ若の若
風呂夏軒一蒲公英の房
蔓草のうりうり赤里小母持て
みのより〜の朝日志つらき

我 崎 齋 巢 美

竹有 四

士朗 四

青岬 四

沙鷗 四

元美 四

月底 四

永齋 四

對我 四

大巢 四

批七初下廿七

いつ掃たすくそさ月の面の塵
傍の浮巢をつくる 草 一
旅衣を〜の柿を笠ふきて
妻の糸糸の耳尔蓋する
まの明いゝゝの〜年ぬらん
飯の御門〜の家牛飼
泉落の差糸を吐ふきれ〜目又張て
木をまきり〜いけ〜け一枚
年の貝大和平の層くも下

鹿野

士朗

黄山

岳輅

九岳

野

朗

山

格

休をうらうらる 晴の山
葛城の神の粧もまきて
霧なの白ひれよまあまの
新のま娘くくくあまの
いつも日の出の子きさる

朗 山 輜 岳 野

鹿野八
士朗七
黄山七
岳輜七
九岳七

批七初下九

月いふか一月あくいふあは
焼うまぬくをうかりけり
葉黄賣を道の枝折よ山越て
火をうまける毎年の名
くふはまの何事をもん初時五
あをんをよんあはの 常
あまのやま暮る原りまきさる
いつゆきくうまき鴨川の水
誰人う板の枝をうき

五道

士朗 大蘇 雨節 野秀 湖風 左雀 浦旦 珉屋

君の身を末 兔うなく
 風のふくたひく 物をさふや
 ちきま〜 衣は目く〜りをたそ
 志喜よみぬ 明〜るさ〜 整
 杉の〜〜ら 四蝶を 這せらる
 蜜の子と 咄もさ〜めぬ末 兼
 粉のよひを 在あるとも 兼
 いろく〜の 必又ふのめく 花のま
 面の泣く〜 燕 かのな〜く
 江の上も 人間ぬ 日ハさうりどり
 いくつとも なく せ 舟桶をかく

批七終初下三千

朗 道 屋 且 雀 風 秀 節 蘇 朗

夏利ふ 蒸居をくける 麦の中
 鮮を漬よと ぬきさ〜る〜し
 け〜せ〜あり〜く 男の罪あり〜
 意を撲をる 舟 残 押出り
 秋風 糸 結き けき 事を 鳴〜泉
 経〜〜様め〜ぬ 中〜ら
 半 節〜を きのふの 伝又 昭 持
 足 糸も ぬをぬ 結を せて 予ら
 京 川の 繩を 三 四 杖乃 月
 煙の 口 さまら ぐ〜の 初 居
 うき 人を たま〜と 寝さ〜を せう 空

朗 蘇 秀 節 凡 雀 且 屋 秀 風 蘆 朗

かくや又あゝ 門 終 音 昇 道
 西 空 小 西 日 終 音 昇 道
 葉 多 多 く 煙 波 又 横 た ぶ
 小 笠 ぶ く 風 心 空 音 昇 道
 几 中 を 追 く 河 り く 三 音 昇 道

- 五道 四
- 士朗 四 湖風 五
- 大蘇 四 左雀 四
- 雨節 三 浦旦 四
- 野秀 四 珉屋 四

批七劫初下世一

圖 曉

時 函 暮 れ 程 州 萱 の 表 あり
 葉 の 木 畑 の 花 を 何 ふ ぐ 也 士朗
 旅 亦 何 處 八 び ぐ 物 と 連 ぎ 硯 静
 笛 亦 一 かく 杖 之 一 野 喬
 ひ 大 ぐ と 月 の 流 ぐ 山 川 小 周 瑞
 麻 亦 亦 ぐ ち け 小 麻 亦 ち ち 楚 江
 さ へ ぐ ち の 葉 八 葉 亦 亦 雪 橋
 心 の 底 亦 亦 心 の 音 亦 白 慈
 曙 の 地 亦 亦 の 鳴 亦 亦 亦 亦 大 清

志ききくしれハ夏の神下橋
 青藍
 ひきやくとく母衣衣連衣を古めて
 朗
 松ハ涼しき銀屏所月
 眺
 灯して喜似て見せたる鶴飼舟
 喬
 何言て嗚やう正位の一考
 東蹊
 存命て飛せハうきよも面白
 左谷
 朽木のやうな琴を要出す
 克之
 ひりくくと花衣を穿する云之日
 茂龍
 手筆糸解多莖蒲公英
 瑞
 可脱く小倉堤をまき舟風
 江
 う能似蝶の理也送りみる
 静

批七於初下世

ハ重むくく人形影の端とひそ
 慈
 灰りきさう寸見小さうき
 橋
 玄白な敷敷あひる塚の百
 藍
 朝日を嗚やハ子香をうらん
 清
 乞食の飯たき持し土の鍋
 蹊
 不其の裾世の妻うあむ
 谷
 扱めまうの敷く敷く乃付そ
 之
 さとりるるたる風一考の月
 龍
 いちくし小佐まのこゆら秋の心
 眺
 鷲路ハ赤きまのほそまわら
 喬
 ちま相寄河やまき鳥の世を捨て
 瑞

嘗る本过へのり摺り
石地落人よものひひ白や
七重の花此ハ重よ咲と紅
旅あちも露の裏と物か意
二日三日の嘘うきしき
明 橋 江 静 慈

圃 曉 三
士 朗 三 大 清 二
硯 静 三 青 藍 二
野 喬 三 東 蹊 二
周 瑞 三 左 谷 二

批七於初下冊三

楚江三 克之二
雪橋三 茂龍二
白慈三

すゑやなむらふ休いあつち
花時多 月 雲の 窓

土朗

大船の浮出家波のまじりて
そよ吹たくる 杖のあつち

阿城

いつとなく山家集よむまのあ

大商

おやせかくりー萩の實をさる

吐山

松の末のうち掃ひたる夕下書

昨采

旅のゆきまをうかりり

橘良

叩とも押ともぬね籠のふさ

竹堂

霧りけりとも遠かきよ

駕風

枕七初下四

薄うはに胡日よむうふ候うら

金谷

恋のほろしを柳引けり

輅

手うらうらと抱女の涙を妻の水
盃させハ述る 菊

菊

伝・糸の村ハ何ぞやう物やりて

城

碁うちう末なと螺の貝ふく

商

夜の萩の啼きを月とよやん

山

萍の葉小似るものもあ

来

たをくもる鳴鶴の里の西智て

良

志をくもるをともあつち砂

堂

風

筆も亦のち色うこく 峯
 雲助り糸のまををん 岳令
 岩のくろこの水を一 口
 むくくと降来る面うむる
 石燈籠へ右を指下 切
 敷は墓の後の跡る 寺の庭
 学の枯葉又雪音を 踏
 百姓の粟嵐賣るる みの海
 板戸のうへを歩ゆ 人々
 木の藪ハ赤もつまぬ 篠もきき
 物を生たる池の 水も

谷 輅 朗 菊 城 商 山 雄 五 良 堂 風

初七初下世

舟も毫のお初りやうる 五三日
 花よ兼つく男背 高き
 色の洗ふ椽の先を 萱草
 杉卯ろよよする 春ハゆく

谷 貫 天 雄

岳輅 三
 士朗 三
 松菊 三
 阿城 三
 大商 三
 吐山 三
 竹堂 三
 駕風 三
 金谷 三
 五雄 三
 躬貫 一

昨来二 木夫一
橘良三

[Faint, mostly illegible handwritten text in vertical columns]

批七款初下廿六

をせ城第

紅梅やまぬきつくる 玉簾
やまもー火子きききの夕 言
猿橋と月のやうつくさよま
ふーののけさ 西のさく山
鳥の尾をまておきく放す
戸をおひひすふ附取うり
一日の雇せ人と出たりり
宇治へもつゝあち 船
古言をきけ八洞のあちを

士朗 岳 輪
兔洲 大阿 武三
嵐峰 駄六 洲

第とる子ふくむるのりくさ
 もせうきさほを標の答付
 せてもなき日の夏福する
 吾月をもてあまなるはらひ
 粟刈まてハ〜ぬ春る
 土臭き茶釜の上北秋の風
 三日海をくり砂原を切り
 蝶死んでるもなき花の枝くら
 何心しき事なき〜又入

三 輜 六 阿 輜 洲 阿 峰

蕉翁 一 兔洲 三

拙七歌初下世七

士朗 一 武三 二
 岳輜 三 駄六 二
 嵐峰 三 丈阿 三

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

春日遊少少

花莖健ふハ水の有りりりり
秋の萩の足る事ーらハ定の
夕ふらや雲の襟ふらあー
萍のふや路通り 菰すう
白飯よ木のけりーをら小僧
鳥の来てはめ守梅のさうり
音々の附ふらうむ数木
おそりともいそく月も
夕白か登るをふくあう味尾

墨山 田央 桂五 竹有 卓池 柯亭 楳間 柳涯 清門

批七初五八

春風や唱海の所の小サ杖賣
大年もかうハワさうー花のふれ
あーろよきさとのよ地を吹花の暮
一ハ父あも花のゆーの山
夕ふれハさうさき猫のさ
風や障子又うらる竹すこき
名月や抱くまきくやる菴の犬



雪洲 方明 湖風 秋奉 佳雄 田江 士峰 常梅 魚来 桐扉

秋法師はとみ八条ハをくすす
 月庭
 望くまのつゝ一様まぢのち
 珉屋
 嘗ハ抄ひ上毎よ三日の月
 東陽
 花の沙汰多くてさす一不二の山
 千阿
 却とすくく花をみ多き山うら
 古東
 夏の月ぬまきくもるきま芒
 菊兮
 蓬蓬人蒼て朝飯喰ふり
 得之
 知へあみく雨のやうんうか
 東暎
 歸る丁とくふくを思へ山の上
 大商
 暮の風初つり来る壇うか
 茂龍
 くるふか笑ふやうや不二の山
 菅茂

批七款初下世丸

湖を象庭よせん夏の月
 蕉角
 智の来て松の葉むら小暮の
 白慈
 白きく小折流るまハなりりなり
 大阜
 刈秋や人おもするまの蔓又
 硯静
 宮崎や舟小来て鳴鹿の音
 金谷
 今きくう啼こハ月もを出こハ
 留子
 するめくむ腮のたさよ毒の毒
 吉甫
 浮出さる月くかくは睦か
 橘老
 嘗よ弦をさるくハ舞やらう
 九兵

病後吟

たふも風不流つく歩み分

騏六



花月のまはひにゆき 鬼尾

圃曉

のつと少るほにそ香の陽色鮮

野喬

子を連る煙を先ふるる男分

岱呂

子梅もいふふゆき色に花う散

竹四郎

常平おもひもよもぬ盤の高

東水

樹はよもな休にむく之日曇

秋鶴

縷けの供登くゆりいせ小所

五道

仏あし誘る日あらしん巻後

麥阿

女郎流絶の愛ちよゆりいん

意逸

柳七歌初下野

推し赤平家を行たる葉の烟

粟大

もふる中推し時あふなく

求巳

掃上せを雲ひみらん空法の糸

鴛風

ふふんよまをせと離のあ

我丈

高あやふ戸の何く言よまゆ

大蘇



月書のまはれやも似る春月

應亭

ねもしんれそこのあかせん草香

素剛

一行て何れも平むやまき

太清

遠白平言ほふ持る月の香

秋國

書子三ほやううくあをけ

浦且

葉吹雪のついでに松ふりや
 月丸う柳ハ長うをいふや
 春風や梅津の里の朝 朗
 川舟のひらりとけきり夕霞
 湖を木の百ふりそり梅の花
 朽けを松屋よけりこの世の目
 放しやきハ大粒ふそり堂
 あききくよきてもつぬ歌
 伊勢笠や生海前の言幸忘
 鴨一離水や水のさきき

木容 沙鷗 周瑞 虎更 魯翠 論草 木人 永齊 左雀 五雄

松七歌初下里

既ふ今もあられまの 菴
 ね 松菊
 ね 宋杉
 ね 櫻
 ね 青崎
 ね 士龍
 ね 樵道
 ね 黄山
 ね 蘭圃
 ね 桐居
 ね 左谷
 ね 金陵
 ね 二月やあはれは梅の花

松菊 宋杉 櫻 青崎 士龍 樵道 黄山 蘭圃 桐居 左谷 金陵

夏の森ハ萩のむらびすもふる巻
赤菴をいつりハ杖り思ひ
萩寺ハ海人の上と云 涅槃像
月夜をく猫又小判よ時鳥
ちるさくくく松の一本のこぬまて
花ハ萩をよけなりなり 山 檜

旭亭

竹趣

士朗

元美

松巢

素兄

白きくのまの獨又ハ阿まりなる
香少色の喰せてやらう秋の堂
月君の松ハ幸誘のゆり
ゆりハ萩ハ雪の上も枯れ

野秀

駄六

青霞

阿城

桃七初下里

鴛鴦を放さくても鳴の湖
り杖の音きく杖の菴くま
十六夜やうけゆりたる山の上
世間ハハ沙汰のふいの小杜
松梅の枝むつつき山家ハ
番薇咲や雀ほくゆり蝶りくる

鴨川の水のかるさよ夕涼
さきをきかむつやうきなる
董咲よりあまの夕日のあ
まよりゆりて之井寺ハむりなり

野乘

柏亭

棋堂

舎童

只白

里有

對我

斗来

史角

武三

之介人ハ一くせゆるよ花の山
 まくーさや人よまききなる石の角
 鳴水鶏之夜ハ下結るく在可引
 暁や生也仙をよます一之身
 山鳥の妻よひ落せむくきけ
 音よ凡く月ハ卯山よ揚雲雀
 十月や菽の中りく不星の山
 さひーさや里の中を枯尾志
 夕よまら杉ハ丸家の忌をり宛
 秘者の涙ハ水よ明るよ水の月

墨推
 九魯
 大巢
 珉上
 宋月
 楚江
 芳水
 平齊
 佳長
 雨節

〔瓶七於初西生〕

花の外ハちりなき菴外
 花咲き中つても月夜もかり志
 毒柳是ハ月日のけやーうか
 ーっねよえつく小倉塘ハ
 名月の月ハめてもく出まなり
 麻吹や砧をうつやよぬの月
 朽りる時ハ花ちるやうよひをりか
 小坊之の年うー山一書の朝
 也宮の善業又交る後葉か
 来てーこをうるや粒のよひりね
 誓ら子なきの花踏か角カ丸る

有磯
 午風
 彬薫
 啟甫
 素月
 如月
 吐山
 友鳳
 沂遊
 青虎

低くくはさくくはけ山さくく
 まい月や月の兔のうた笑うん
 日のうけの小笠よ跡る枯竹式
 彖社の石よさつるくさきうか
 風のあおも月の志はくあり
 秋の風雀をたてて放ちぐり
 蜻蛉や飛ハ吹ともはるの上
 松明て竹いゝるあほくく
 去るや小貝くくつくをくく
 登壇をたおせて児のきくく
 へり又は芒のうへに表表くく

二丸
 可竹
 竹堂
 斗石
 葛齋
 蘇下
 吐月
 兔洲
 松菴
 朱鶴
 梁基

枕七初下雷

あ月や響く小あもやもくく
 炬火をよあせ鞍馬の番ねろく
 あともをなふ月くれて立てる枯花
 風や仙を健き山 のくく
 とうくくくくくくくくくく

其中
 雪封
 株洲
 橘良
 里桐

いやるまき空より月の白ひけ
 松風もやんて巻物の巻うか
 さくむくハ山ハ石くく杯を像
 名月ハ只山さくく
 障布とに吹ほと小雪の嵐山

草人
 可玄
 雨来
 和楽
 丈阿

初雪や香の食やと菓を荷て
 雨の日小生阿くりくり苔の石
 小夜受て梅の中ゆく月よ小
 秋の雨ふすはりとさき小菖
 うら山一何雨の時と来そそ
 空月の中燈の沖をちく青
 松風おくれ来の之の時 多
 くらりや人うけの妙竹の中
 北八山南ハ海を 天の川
 谷のにおの来ハ倚くそ 神楽山
 雲を連一ニ来火とも寸名砂籠

躬貫 蘭谷 乙牛 嵐峰 かつ 楓江 霞洲 葛井 鹿野 得舟 岳輅

批七秋初下四五

文化六己巳秋

うしろある 波よつ
舟の娘 しくく
のしうなるをききあはれ

おのれはあはれなるをききあはれ
おのれはあはれなるをききあはれ

批七終五下五

おのれはあはれ

二月十六日

妻を多し命治の小鴨の友程ひ
中しなきし梅の玉氣なりたる
有暇の月を空庭のそよよ足そ
猿の心をやいそひよけり
盃八境のそよよほろろ
書あゝ吹小家子木を割
約束の終辭も程ちう
夕暮をよしとよ肩とつて来る

入鼻 硯静 周瑞 大巢 野橋 圃曉 茂竜 楚江

ながうき相より時節初より
 あそりともせは小豆粥たく
 玉の珠を然るをわし後の有
 物々々々三笠の月の清きき
 此つふりし木の末つく鐘の音
 昔の白きし中橋刈らる
 一木橋て風ひく少神の若菜
 相人ほけし高器笛をふく
 志く雲の中より暮の空初
 七日遊びし露うすむきり
 おもしあき魚の若を刺すの波

白慈
 大阜
 硯静
 周瑞
 大巢
 池橋
 茂竜
 圃曉
 楚江
 白慈
 大阜

批七歌五下世三

まらうらゆ多き葉之末 旅
 薄くも襟新しき 秋の衣
 曾の芥のやうさもなき
 杜鰲米を食する日のはうと
 思の杉系柵中々新さし
 咲橋ふもる々々吹 友
 ぬけくたうき居風呂の座
 扱ふゆふ系を海の中真り
 隈もなきき 夕暮 萩の 目
 津守をりし 湯衣ふ秋の初冬
 女さうく 楚 藝を 対
 かりそめな結ひもあぬ糸 綱

硯静
 周瑞
 大巢
 池橋
 茂竜
 圃曉
 楚江
 白慈
 大阜
 硯静
 周瑞
 大巢

多量の字をたのむ 朔日
 子の面くまけハ煤とくハ襖
 手三指さうくひすめくえ
 苔の妻めくくくく壳の第り
 筆よけありの砂る 腫 転

桎江 白蒸 圃曉 硯静

枕七幼五十三

二月六日二九亭アウ

如強くくく木ハゆけ子なりハ重楳
 畠うら子内く山くのくね
 多あゆゆゆるさの餅のまを
 たまぐちの燻を抄ハ 言蓋
 かりくねの横ハ氣さく言の息
 人志く露の萩ぬきむらん
 義くく秋を約名く葉中
 ちりくくちりくく登り煮つく

玉山 二九 士綱 雲羅 吐曉 久後 浦雀 萬巻

兔も角もやうて縹の道れき
 赤うあ家やうハ障ぬ 初雪
 漆阿墨そぞろふくもあまき
 少らうもあふまき抱よ由
 月々々々縹のかり鳥のふた
 う筆を白膠木の象又色外
 波ささくくと蟲飛はくそ舟乃
 面もあふくも那筆油う
 ゆふまれのそよ中ふく乾麟
 四よさくくと初雪 糸
 つくろぬふきよりの長筆を
 大阜 玉山
 吐曉 浦雀
 二九 萬花
 士綱 雲羅

批七終五下世四

唇さくくと縹の大文字
 立捲ふ松の中くくふく
 羽めけ鳥の地もほもきぬ
 すく世も吹末のそよを焼燧
 岡は隠とも 志度の湖 待
 西村と知巴も赤流染 餉
 利根なちつを呵羨家 端近
 噴うく傍輩中 出魚うをり
 きくのそよ白をそよや露て長
 小むくろの月をんくと燧障
 寺の礎ハまけて舞 糸
 大阜 玉山
 吐曉 浦雀
 二九 萬花
 士綱 雲羅

塵芥一流に明の甲 川 研書
 夏人の歌り 鹽をふりし 士朗
 まくまのやうに塵芥の中へ 大阜
 蛙鳴の聲が夜月よなるやん 岳路
 沙河を渡るのをやま 秋巻
 七瀬のこゝろのけを 観静
 ふねをいふは、波はゆる 士朗
 花を、よみむらに 大阜
 根あきし 岳路
 加々田 蝶の 秋巻
 賤く小家の 観静

此七歌五十一枚

志海舟をこぼすに 白巻著 士朗
 しの歌を 大阜
 朝の心 岳路
 鷗をこぼす 秋巻
 遠處、 観静
 宇流、 士朗
 雪の心 大阜
 ちよと 岳路
 裡も 秋巻
 ちよと 観静
 白巻著、 士朗

この脱軒をほたるりたり
初を死を命ひくけしと云 雑 雛
多子のをそくする草 ちとくし
鬼貫々 水らむうん子 咄ひをり
はきぬやすくのをぬくのり 雑

五羽
兵格
秋卷
五雄
雑業

批七次五下廿

返か

天明八戌と一三月初の子業ハ
舞するのよきつひよかくま ば
あさくやまのやうてげ衣の浦子
うこま事つて由可架の人くよ
脚ら色かまはるるむとひく

曉臺

桃や赤美沖の踏も多子割よ
のちりちりけつ草の角 組

大阜

山の音ゆくの雨よふかき
後櫃うらよふ出るひまなく
やうし海もつらきよ煙き社の月
離うらまきし高のゆきうか

社尹
民情
帯栲
聴吳

一 枕七効五下廿八

素

元日や四つよ置きしし線守守
元日や月よりそ手き栲の花
花ぬせハ確てハみも出さ
雪をよそよ思ひまてくも花の素
美寂の小藪傳ひよ春りりり
藤返まきハつ子善菜賣 里 男
雪のやと栲やとまきもけあたり
雪のたなく藪折く小寺 つか
とわくと素の春より伊勢系
おらまきよとよ手し栲 せ

養虬
少女
桂五
臥央
葛井
橘良
秋道
花狂
風洲
鷹行

若の葉や雀をそまきひ貝の口
雲の目もゆく山間のかきと芒
山之家より里より佐も雲の風
たう風や美しうき我の僕僕師
韋法師をを嵐のこころは雲の霞
葉の花の事長て破れし桂笠
湖へうらまを雛子のやうくし

妻我吟

和衣草の面をこしけりは西より
流き木のこゝろ松の葉むらさ
のうきたる人の汗へりて

國お

于當

孔早

香石

竹堂

推己

大商

吐山

智凡

批七幼五下九

る人々の花の阿るそ山橋
花さくると利根を白くあかりなり
人のうへも老木のそはひうらまき
因幡のむむ蛙もそぬささめくや
海原のこゝろ乾きし香う背の月
今控らまきくも折たきはくし
とらくくく雛つるうらまを男の子

餞別

けりまやんのまけを夜のけか
筆をくくく善や隣子と啼丁
り丁やま一つく腹海こら

鹿林

也梁

大蕪

卓池

雄洲

梁臺

五道

兆雲

阿城

松堂

からあらし常とあし煙つか

長考

夏

蛇さばときけハ杉をわく一鳥衣

蕉雨

あらしもろえ急ぎの音唐土と花籠

信昌

けいふふは不二ハちきくしと花やえ

魯堂

卯の花や水ようつきの物り岳

阿を

うの花の煙子鳥出に寺子小

一寛

本宿川や桑夕火の宿にまを嵐

專阿

旅行吟 三句

省曳子出たり垂井のつま古香

元美

こしう書や鳥もをらぬ佐佐泊

大山嶺

批七初五下三干

短中書や何事もなすきとまおくら

龜年

浪花古に乳口桑店より

燕子花こも秋のそりせ

波六

り柔や摺鉢よりる 葵 草

地秀

さしーさや納ねとくさるわの海

砂牛

角力とりと肩背並へて涼をり

田江

むらあはうらの老をりまの月

長女

洋のそ花や浪色をそぬまくと

竹有

秋

あらしよく枯ハ来まなり柔のつ

柔屋

文月と桂枝のそりとあそをり

九岳

蟬鳴をよきこむ月のひかり

可井

夏家の光景

啼まひて草葉よよひて
かゝくも庭の留ま居や蟋蟀
膝をうや着もせしらぬ庭の裏
渡井内のけしきをたもひ

一葉

休趣

秋風

わいせしや

曳舟の船をひくと物も苦うか
晴の晴も長程の西日 うか
玉縁をよそへむううはそり女が花
いあまの山中よやしりこり

梅畠

千雄

方明

批七歌五下三

赤葉の甲あまきり涼きを頼うか

魯隱

閑居傍表

ワひそ〜寂つら〜てもその花
寸竹よまゐるをうきをもほろおき

未山

姓岡

冬

軒さへ露そのすしに神ふはま
本う〜〜やびきてふせくる危の子
山寺の屋ををひく雪の束のつら
う強くと雪よ〜〜て足る小井が
降〜〜雪〜〜を雪のそら
風子を送るるを〜〜

桐栖

砂文

可青

花山

李莖

月夜のまじき事をうくるいしむ

黄山

いしむるうりー東照宮の書

とあつてせらふよ

松風ハ案よひるり墨火

煙

かみ

文化六巳巳奉

晩夏

淡墨のりくたのぼるる

批七款五下三十一

宇戸加良次集

青柳 枝少菊うたれあつらふと

をりく 松風よお名をほもたう

とハ 紅白のまうこすり 附合ハ

落月 中よ梅の聲ふらあやし

外 梅を魚こてく 琴音を

まうあしーいさういあーの

有る集

教示を以て亭外亭の心裏の
花意地持月也

三才亭

士朗

批七初上六

浦かきに
浦島を以て鶴の多き所之
空の朝りの浪よひあがる
大釜の飯の飽よも八重衣殿
破磨ろくろを以て門口
ほろくと梅の梢の星の月
寄を以て亀よ和巾かぶる
塗下袴を以てまはるく踏を
大石の人を以てまはるく
古石の何を以て三笠山

士朗

介亭

朗

亭

朗

亭

新下川へ丸木うちをり
 しくくと極んであつる雲の如
 おもき摘日や年又はくちか
 月をえり星の料理を花のを
 ちりあけて鳴り花の 亭

朗亭 奉亭 朗亭

四季混雜

冬うらやばくや鶴も雪の雪の

道表

批七初花八

雪の雪又入さるる垣のうま
 不二筑波とあてえり星を
 若人の若よりつらん花の言
 つくろひもさるる花の言
 元歩り人のさるる花の言
 きらくは花の言を月の御
 雪の若より花の小家うま
 雪鞋をく目先より花の言
 花の言をくくくくくく
 夕立や人うらやばくくく
 綿衣や人うらやばくく

宇洋 桐居 鹿野 柯亭 可都里 長女 馮月 不卜 徳呂 米美 花竹

今この月も色なり秋の水
 門よりれハ初は志あり
 山はまうほむゆい橋の月
 橋とくぬあまもまハ橋の花
 清瀬やまのりくこれハ雲の水
 引もをを橋よせをや妻の山
 秋の月床をううよみろのてはし
 押おしく流らんを基る橋うを
 のうくくもる中四月のつり山
 橋柳河の昔もあまてつと引
 雲出する月をもよもくぬ橋うを

批七初上廿九

林六 成美 茂原 九兵 翠川 雲河 木常 蒼乳 嵐外 種五

世の中を重よとくもつ鳥引
 門へある 重よとくもつ鳥引
 人星、岩さへをくく 重よとくも
 五月あまよとあり 念をう 暗の海
 七夕よりあなへ歩り 涉茅引
 秋の束のたさるり 重よとくも
 夕照中野のつりも 秋の山
 隣うくく 重よとくも 橋うくも
 人の子の袴 重よとくも 橋うくも
 花は雲際をのいさぬ 斗をり
 末うくく 重よとくも 橋うくも

野秀 梅堂 棋間 梅夫 花叙 卧央 雪雜 卓池 秀峰 甫且 得芝

吾をもちくは雀も遊りはとも禁
 身小鳴う鳥の類よ許たくき
 山嶽ハ山を屏風よ 帰りり花
 菴の言て付もりの人も其に
 山さとの宿をへるなり居の言
 人の生あり月の夜をさ 依る言
 名月のやとり其言ん 志をその
 指扇花 我腮のはつうーき
 海山ハ山く名月の言ト う言
 居啼く葉の下へ居る物 う言
 山藪中是くけり嘆ハ恒くーろ

批七歌初上三

五雄
 葛井
 関史
 竹有
 梅洲
 和东
 佳雄
 雄六
 黄山
 茶系
 表志

麻安まろ海る下も旅の言
 山も前安もいそ付 言の言
 子雀ハ何を捨るを秋の 花
 山並ハ心 月をさるうめ 言
 久かく命 誓の言もを言 極の言
 杉林も何りも言 降小 言 言
 朝負ハ心も言の 言 う言
 名月やら言 根をさるうけも言
 風吹ハ言 言をさるうけの 言
 枯風の言をさるうけの 言
 きりくハ言の言ハ言りや言

仙凡
 元美
 啓言
 方明
 志月
 怡言
 山月
 杉堂
 葛三
 伯先
 鸞岡

あけほのくもよりよよものもは
 花のにおは塵をきこふ庭の
 ちりまりのをりをとや女は花
 まはるをもちりしつと後
 大名の鳥を並つてけしんく分
 老ぬきハ上子又喰ぬせり
 舟は藤くあけのつてき二月
 人並のつを指りりささめ
 色めどハ杉よとく之と喜の月
 海あはく塔は色をり林のれ
 山はハ一帯をすまともハ
 源

虎杖 有磯 何頼 粗亮 千阿 素梨 汝策 桐屏 可雪 月应 介亭

批七歌初上卅一

志くも海も面鏡ふ日と秋はわり
 降まらざる空よりゆきく桔梗外
 妙月平とや足本のまきく一の春
 月阿ハ杉のこもりよのやまき
 けりしとや丸く山をたらしやま
 雲のこぼや雲のたらし中時色
 吹たさぬ日も林風の卯山計
 雨ちりくをせハ山をけ林の風
 春のけり雨をささや林の山
 あきの春やあけはうせりるの鳥
 浮きあがりまきハ花の浮夜外

阿亮 柳莊 希言 雲帯 如毛 里三 孝童 三春良 左誥 秋拳 梅香都

人るはらうくひるそ答答の考
 芦の穂のちる門の 依嵐
 乞食よ志けくひるは附せら
 精とを落くき氣うやまうをら
 矢田の世の牡丹の月を足あん
 審うきぬたはこくの中
 幣や焦ん菜釜の下のきり
 世糸の強り 鶏う 啼
 初冬の日ハぬは本間まで
 人すの隙の理大根を 堀
 几中提て出れハ風う起るく

格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格

批七於初上世三

言をくする武庫の白雲
 西向て少座る佛よ高くくむ
 木の木下よりける 流 差
 四五輪の牡丹少るるを流出々
 かしたの智恵をかりる初冬
 燒松の豆ハ消つて火を流
 このを水のぬ息を足あする
 志く落のきのふの秋もれり
 早乃月のとすいさくま
 鏡水く提ひは取りくせ身魂
 言は差うく啼る考く

朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格

虎毛のつたのさへつく垣の内
 鎖の鎖たる苔の一ツ井
 夕暮ハ糖よむせらゆりよそ
 田螺汁多くく納本をすら
 山橋あぐらゆよおそこのそそ
 宿の古産の莖毛

亭 朗 拾 朗 亭

文化六年己九月

批七初上冊四

藁つゝ集

自序

代かく小田抄けいせんを利
 子苗とる日乃夏のおとま
 田のそよくあーたごを乃
 香のさるくくと釈する歌の
 里々々きもさあつとあをひあひ
 あ〜〜多り多るくの多し月を此
 一事は拾ひら〜〜つハ十年
 近くなりそふ生涯のり〜を
 出〜あらう〜〜多り小つとを

藁つゝ集

作りたもはむきを結ぶや
ひをの詠よとふうらんよとあり
計り

文化七庚午仲秋 弦六

福田舎

批七初四下一

歌仙行

才よ老の積るいそやーとふの香

葉のそよおしおのたかこ 隅

新 舊のせをこよ維きを耐まて

とりをちあさる枯めいろを

菴 偈を言ハ月の袖めをり

あうきさけいかにくよはさ

松風の夜やのめく志やうら

い川中よとせまる小物女必物

山寺此をの物茶まうち眠り

白岡

駒六

士朗

卜

六

朗

下

六

朗

鹿のたぐはし居新戸りて
 夕暮ハ興の中も鳴かき守
 竹の幸量をももろもろ
 むらうある花の根ねふ従ふ
 落もうらやもねよやうる
 朗六松朗六

白圖四 騏六十二
 士朗士 岳輅八

批七效四下三

風冬之部

空をそやまへ 曉の山峯の松
 曉臺

此白化るる事よあつて仰
 のふ事もまゝい毛衣の襟ハ良こそ
 空をわらめと云出たきハ 結六
 出集たりと云ふ
 むらうらやもねよやうる

曙やあけくハ雪ふ煙もれき
 きのふんしすふもあけハ松尾茶
 松芦や唐の玉ハ白髪あけく
 鹿野 岳輅 士朗

十月の西やうぐれの秋あさく
海士の家のあし穴ふきけ紐の皮
初とらぬがハ雪のふち枯れうさ

駒六
湖風
阿城

生涯五十年ハ暮のこくとく

つねぬ百年ハ暮のこくとくあまはは

城ハ暮のぬのむうく今ハ

名古屋ハ引移させひひその

阿とつハ老たる杉志なりあひて

今ハ名古屋ハ移くくとすりぬ

批七款四下五

蒼くくくと鳴中流源の川ふさ

駒六

燦々たるやちを終つて湖のま

元美

かきくくと暮あつむ冬の中つハ

駒上

傍くくと人の巢居る暮暮さ

大阜

老慵

名古屋ハおもし経たり唐の月

駒六

灰とむくあをうつむ杉風

士朗

扇の表もこのりちの里も是れ
 的場も終るよろさけてり
 曙の毛櫛やうをるらん
 ありつうく流れ出たり
 訪ふはは留ると暮るるも
 西の青白を傘下り書
 面白う伊勢の料理を取延て
 高祿の伊豆のたてぬ山も
 むく雀もこのりき終るつう
 終るをよ終るよその河はする
 名月もよおるる其處所

明 有 雄 央 朗 六 大 方 竹 五 卧
 明 有 雄 央 朗 六 大 方 竹 五 卧

批七勢四下六

芳盤あちの津油の角力取
 書の民をそく是ら又造り終
 人のそれる花の表をばける
 案しさをそく書を善し
 離の名終りもぬるも
 おすこの名も終る付たり
 涙も清ら新の終り
 らる休の母の書を又善し
 琴のひと終りとの書終
 寄てと終る花表のりま
 酒も終るも書のみし

有 六 央 朗 岳 格 有 六 央 朗 六 卓

け角やとり巻よつてあるくなり
 そのを管よする人よまきさつ
 星まらるまらまらけき松の風
 さふまもせぬ海つきの月
 魔つきて小まきとヤロク
 波つきの程うあつるまきく
 八重津を流すあつる猫の鈴
 窓のほそをまきつるゆりま
 帰るまら水を一抄流すうそ
 むらうかきまきま真のしん
 咲花の葉をそのを流きたり

批七幼四下七

格 央 朗 六 有 格 央 朗 六 阜 格

少流をらるふ鳳ゆりまきせり

有

騏六七 士朗六 卧央六
 五雄二 竹有六 方明二
 大阜三 岳輅四

秋之部

ぬの月歩りくをれはふも藤は

竹有

きくの花を掃たぬ神の瀧らほき
亮一時花のわらハ麻の唱死ん
横雲の杉山海ら麻のこ 名
その原やまといハ何を唱小麻
風ささくハ雲をたく山の麻の考
詠うてハ嵐のわらう 振 久南
人ささくハ雲をたく山の麻の考
季とハハつ雲とわらふの月
花すくきハ雲をたく山の麻の考
秋すくきハ雲の朝夕ハくハくハく
蜻蛉のきくハくハくハくハくハく

麥阿
秋九
墨山
硯静
駿六
五雄
萍梅
駿六
竹趣
士朗
梅洲

批七於四下八

きくの花を掃たぬ神の瀧らほき
亮一時花のわらハ麻の唱死ん
横雲の杉山海ら麻のこ 名
その原やまといハ何を唱小麻
風ささくハ雲をたく山の麻の考
詠うてハ嵐のわらう 振 久南
人ささくハ雲をたく山の麻の考
季とハハつ雲とわらふの月
花すくきハ雲をたく山の麻の考
秋すくきハ雲の朝夕ハくハくハく
蜻蛉のきくハくハくハくハくハく

葛齋
野秀
鹿野
駿上
彭朔
烏丸
徐英
駿六
卓老
岳輅

勢州菩提山萱堂三夜三日参籠時

さくハくハくハくハくハくハくハく

秋の暮ハくハくハくハくハくハくハく

名月やハくハくハくハくハくハくハく

明月何處有

柱五

病後

そあつちを待子とりつゝ歩み外

駝六

上福は修せしれり郊外に

月を乞ふ夜ハあまをえうら

をうらあり

月丸くあき清後んせよ丁の影

射道

美う代お言砂の松よらふの月

由肆

秋の萩ハ只似り燈よあやま

秋の萩の是事志らふ定の月

卧央

月の出を乞ふく庭をすきせ

珉屋

批七効四下九

九月空好日竹生鶴よゆうつたふ

風のうこあくくそ日の暮る斗子

月定陰は宿る湖面月うら

了く雞夫人語の響を聴す

自塵を出たさあ地せく

湖を枕ふあこり竹生 鶴

駝六

いふまあ平果ち落来るひなの雲

兆雲

目をこゝあす時輪裏の望松外

駝六

あつ秋ち月松をよを詠はる

素剛

蕨山よ登る事 五十年 来又

今逢 冬月の末ニ岳を像を

終りなり

お十とせの枯や仙のつ方をちき

駝六

あふくもあふく二岳の月

大阜

石海と蒼海東又風路

五雄

夏之部

衣ぬれハちちきもすい衣

桂五

はふくそハ父のそのがんま

士朗

おやうくハ子小豫なりこあもく

駝六

雲と見し花の枯枝を蚊せり

而后

陳轍高も量も蚊登物る家よ基

少汝

手此とくく所中て基てハり常

尼閑樹

批七勢四下十

極るやうく杉のこく夕すくみ

浦且

夕良やかろうなりたる油

九岳

夕く知の奄のあより此料理

駝六

時鳥一椀の茶も扱やま

大阜

そとまき守唱ぬうちちう屋

林容

月もほひそ廻りそのせ時音

駝六

ちとまき吳越のあちちとけあり

竹有

吹さつてけさう鳴やむ陳轍

岳格

ちとまき三のちもさよけのち

田江

牡丹咲く俄よウを起り

松呂

ちとまきちちちち月のちち

鹿野

下々ふふおて十日こたり苔の花
 夏の日 の暮るをすこぬ月長
 夏の日思ひぬくこよ明よりり
 友の月あつてもいさも林深く
 山よ一掃て起きたるもすき嵐
 水鶏鳴泣をといひす細江
 夕鳥鳴ゆゆふふおぬる葉れ葉
 夕鳥也湖の水引かこき
 夕鳥の果おもしろや水のう
 笋やを朝ハをりけり背をこぬ
 隣々う灯うらるる若葉ふりか

批七於四下十一

駿六 米汁 駕風 五雄 棋間 松菊 駒六 昆明 也人 萬中 駿上

夏鳥よさハつてをいさぬ寺
 夏鳥の蚊のこの手栢よとよりり

春之部

梅の花をきき玉の塚くれ
 山里ハせをまことのや梅のほ
 夕梅蛙とくつて鳴をぐりり
 手のふえと梅ハ花の木のふ
 ハ重花梅志けれる常もゆり
 花毎よは花もつたりのハ重梅
 春風の竹よ新さす雀を南
 下々それまをすくまを雀け

東雨 駿六 岳路 駿六 大阜 黄山 圃曉 梅間 徐英 金谷

うらりくと出てけり下なほひよも
 花はつらなるものごとくゆる山家
 花ををんよある人もあはる山家
 大摩もかういひそりて花のそれ
 静さをもををををを梅の花のま
 ものこすききとて面白なるの風
 喜の風細つりある 障り
 喜風やそりれゆる田原か
 やふへい山家もするよ喜の風
 喜よもこの白むつりや喜の風
 きとあんよもき人の海や障り月

永齊
 少汝
 駿六
 方明
 駿六
 竹有
 茂龍
 茂東
 月底
 李臺
 五道

批七勢四下十二

穀寺や海士の上くる涅槃係
 山寺や入佛性まは帰る
 秋嵐ハ松のうきよ鳴りし
 輪うりし 帯はもゆるり種も

士朗
 南巢
 沙鷗
 有磯

入唐讚

初機つるくハ法も山色式
 何某新婚の賀よ
 喜の目おつりなもよ 落と外
 喜の白とや穀又 函のおと
 喜小二日ありてハ日まきせ

駿六
 竹堂
 大商

荒海や去りに赤き雲の魚
り雲を難波の雲は見えたり

桂五
杉燕

諸國四季部

梅咲や春のふる雪の此

椿堂

雪き日のあまはるをさける梅

駿六

見くらゝき旅の雲やまきの面

車池

二月降る雪の中毎のあまの雲

駿六

二月やうはく志わく人の志

大津 駿道

色のおもふ雲を二月の嵐は

駿六

牙ひとらや回標の雲を照らす

草 艸

梅柳雲の圓鼻と見えたり

筆 栗居

瓶七款四下十三

梅柳雲をよめて来ませ月の影

駿六

花の雲は似たり雲雲の時を

京 其成

うらうらう雲斗はほくきす

駿六

あすはあまの雲を雲うを付る

雀 雀鳴

之日月も序相なりややとくはす

駿六

との花の雲はとも見えは雲は雲

大坂 長齊

花は水も雲は雲の雲の山

駿六

月の出て目を映接の雲は雲

琴 于當

よく見えは月やと替る色の山

駿六

をう聲は遠れかや家や雲の川

龍山

七夕の雲は編雲はなうりなり

駿六

秀彦と住よかりり其の力 葦 岩若

友の月あしなき心あせよゆれ 駿六

ちとのつるも其の情すも守志の歌 大坂 米彦

月よ嘆をあるなくよ杉のあひ 駿六

こやくくと情をのさけり田一枚 江戸 三彦

田を植くくふ六調り守うこをい 駿六

予しもホウ貝く穴はる清水を 七 曉浦

可也もも素せて出たるを物集 駿六

そなる物のすきさ其の雲面ゆ 大坂 瑞馬

炭竈のうへは清りり其のそ 芳 柳庄 駿六

祝七次四下十五

鴨鳴るる船の夕のこふり 近江 砂文 駿六

稚のそれるる船や海の日 駿六

此より又まゝに船板のよき冬の日 駿六

二見の浦まで ミ 千阿

名月の出汐や沖のそよきあち 四州 可都里 駿六

月のおい強よまな 栗 殿の森よま 大坂 井六 駿六

森のまなや星の二帯もあつらん 大坂 井六 駿六

丁るる情のうふかすこころ 大坂 井六 駿六

いつゆるともなく居る帰り 大坂 井六 駿六

まの君の毎日降や諏訪の湖
赤鷹の君や二北宗尾浪富士
淡雪又唱と妻あやうく守りも
赤鷹又湖田を歩む鳥くれ
人啼く時を啼く啼くあ
る時くも靴うぬくこれ
入やすき月ハ着系はかど
朔風や着そふ似く山の形
引着を杉葉さうりり
葦は少かけて蛇やの佐藤外
魁るとハ年暮かへり

竹齋

駿六

秀媛貞

駿六

桃林

駿六

成美

駿六

香櫓堂

駿六

正
大節

批七次四下五

まの君の毎日降や諏訪の湖
赤鷹の君や二北宗尾浪富士
淡雪又唱と妻あやうく守りも
赤鷹又湖田を歩む鳥くれ
人啼く時を啼く啼くあ
る時くも靴うぬくこれ
入やすき月ハ着系はかど
朔風や着そふ似く山の形
引着を杉葉さうりり
葦は少かけて蛇やの佐藤外
魁るとハ年暮かへり

駿六

多
語溪

駿六

大
五来

駿六

秋
秋奉

駿六

盛
盛呂

駿六

正
喜年

駿六

常小梅をき宿のすきやしき 魯隱

三をりやと常きくぬまきやう 駿六

鴨中しとらハ名の際をゆく 其 琴州

幅幅や芥をりや下 駿六

出羽の風見山とふ西子若りや

涼風の生せ雨う月 近 芳之

宮六ま各孫をえりり 駿六

よしやせハあふふ雨を花の宿 京 大左

花さうりやう 平松 亞漢

さうらう 京 六曹

念をりやあすハ端へき山さうらう

批七款四下六

神写とさうらひらけし旦うれ 駿六

其系や芒をすう 土卯

三月の筆子 駿六

常のき 大坂 尺艾

夏しき日 駿六

鹿鳴を 其 仙風

旅人ハ 駿六

さふ 其 菊也

菅持山 駿六

松の 京 蒼丸

駿六

夕白やまゝいゝぬむのうらぐり
 きのふやと七洲も船白雲まじり
 雨の日ハ雲も柳もぬびりぐり
 犬の寐と形さ(林、春白り)
 二声とかまひある藤の表山
 けくきに花を鳴くまじ
 月影や仕事も燦る涉呂山
 浮草も月うらぐりの表川
 生午の古根も冬の日影
 月雪も表つる守や竹の表
 なちよふとりの雲とぬまぐり

石毛

駒六

宇宙

駒六

蕙竹里

駒六

蕉雨

駒六

春臺

駒六

空阿

一紙七歌四下六

あり畜のうら毛も漏れ湖の雪
 本かうーやとつさりぬ富士の雪
 富士の山をや春もあつうー
 蛙鳴沈うほいう春のぬ
 廣沢や丸うなりたる海の水
 梅咲や高とれ畜の落ぐり
 春の表や白いつき合ふ梅と襟
 由ふ春やあむくと春の浮舟
 きー鳴く山をばあむ春の雪
 きー鳴くなれりと舟のかき巻

駒六

春坡

駒六

呂兆

駒六

京芦涯

駒六

雄淵

駒六

雲帯

駒六

蝶のりへ人もちまきく又ゆるが

如毛

蝶香のりへもちまきくすそ月面

京月峯

誰とらう山の井歌く春のあ

駿六

糸先よき梅よきのふに登らち

春蛾

梅うまやこし袖くあり蝶

駿六

正月や火桶抱くう巻の花

駿六

四重衣の杉よき巻く遠き

長孔阜

夕月の水の中やそそ着美ふか

駿六

月丸くお香丸くぬむりぐり

鴨一羽横よきねり音の月

靴七款四十九

夏の衣よきも暈す山のうへ

カ眉山

性ふや風よきも暈す舟の上

白乙二

舟中うら旅人河や夏の月

駿六

青梅よゆふつけ音の春明

対竹

肘巻る南のなるはの春明

駿六

起つひてねり鼻する男麻斗

花陶

唱麻のやきうへにたる山

大坂春人

山ふたうらうとく出くつるふの月

駿六

小るして二よなるぬりつる

良平

戀月玉因横おハやらの風

文角

張りしや炭火のほゆる松の風 駒六

玉肌や赤うらうらむさき子の松 推巳

春柳のやう結子や赤りぬつき 駒六

筍のこゝろもこゝろぬきほひらか 堺茂良

其のゆやふふ搦てけり豆鼓茶砂 京雪雄

去ぬまぬ唇うや赤うのうらうき 駒六

初丁を二粒又死れ伊勢若尾張 江戸巢北

思ひすの彩の彩巻やけりうらう 駒六

仮初の彩の赤や赤巻るの赤巻 駒六

炭俵つゝ丸い圓ゆきまほひひし 駒六

みかんの赤いと彩ま〜〜〜

秋七夜四下干

あゝぬらうなうなうすあめら

あゝひありとハ

あゝ悪徳和尚のよもゆへり中

あゝそハとまれ〜とまれ

あゝぬらうなうなうすあめら

あゝぬらうなうなうすあめら

あゝぬらうなうなうすあめら

あゝぬらうなうなうすあめら

あゝぬらうなうなうすあめら

あゝぬらうなうなうすあめら

梅笠

批七終下三王

飲中八仙仙上朱樹七十翁
醉後遺
能疎無方足疎々舟子乘子似たる
安里或上云眼ををり皆令
阿利雅辨中を相手りて
何あふ世々今も阿は杯盤狂藉

次中、故山

手紙藤下足踏をしら書

又政辛未やう喜 槎雀

淡中八秋仙
何事も多て甚立河
松八日比の梅の
蝶とりののやふ雀の高うりて
翠簾くけつは風ゆるみ
大うこの月あまきたる笛の春
さくらりと秋葉をり
二股又菊てをうき鹿の角
水くむ小僧髪白ひひり
妓王寺の堂の傾科か書るとて

批七秋初上二

淡中八秋仙

何事も多て甚立河

松八日比の梅の

蝶とりののやふ雀の高うりて

翠簾くけつは風ゆるみ

大うこの月あまきたる笛の春

さくらりと秋葉をり

二股又菊てをうき鹿の角

水くむ小僧髪白ひひり

妓王寺の堂の傾科か書るとて

士朗

大蘇

五道

槎雀

野秀

餘祥

秋攀

素月

湖凡

自然子のほくそ敷の根を塘
 瘡もまろくしきんさふ書
 消のありたる橋のふ書
 善鷺のふもふふやん
 伊膳をこぼし〜桃畑一り
 立る〜物〜也たす小孫雛
 言ふ〜たたて〜ふり鼓うり
 川舟ふ飛来〜たる月の中〜
 萩の白ひをこぼし風の裏
 うそ〜きき小袖ふ〜きき
 ぬき板戸尔うらる山あけ

平舟 石老 珉屋 蘇 道 雀 秀 祥 攀 月 風

枕七初上三

猫のまろく子をとろふ毛鷺の声の中
 梓あ〜う〜つ〜〜〜
 多を流ふ橋木柄板を捨る也
 是のゆるるの藤下を〜
 米子外十日尔あまの舟うら
 口あ色るあもかゆき〜月の橋
 知〜ふ〜さ〜ま〜は〜け〜と〜ふ〜の〜情〜を
 杖をせ〜と〜ふ〜あ〜る〜う〜と〜き
 背きぬ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 風〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 山仗の翁持〜〜〜〜〜〜〜〜〜

奔 老 屋 蕪 雀 秀 祥 攀 月 風

菜はほむる神鳥川の町
 煤の香のすこたますぬ飯の泡
 あろろうせしう陽炎をやらぬ
 人ハニカ花の本の百みおすつて
 蛙とうく鳥とそつて

春 老 屋 蕪 号

士朗一

大蕪四 湖風三

五道三 平齋三

槎雀三 石老三

野秀三 珉屋三

批七初上四

餘祥三

秋攀三

素月三

必月の招這ふ隙のちうくうか
 麻まきしてはる附ハ来ふりり
 春の風格をいつてハ多とらむて
 山乃を鼓の地はるう、すしは
 晴らる月かやのまをらん
 蒼蒼ぬますすう、春の沸き

平齋 士朗 珉屋 野秀 竹有 齋

層の来る望田ありありみちを待て
大くこの川の急をそそぐけしむ
行燈も先ちそわける義持
舟を舟してもかぬつぎあさ
きのふふして女帝の連のふし人
後子の穴のふしこころのき
梨畑も蜀黍もくも月花ゆ
馬ふがいたるひし世のつゆ
新穀をこのふし草の清り
池をともりふし地の垣
も川急の足越ふつもふし

沈七初上五

朗 齋 有 秀 屋 朗 奇 有 秀 屋 朗

蝶の居とく寄る水戸をこぞく
まきのふり跡したる祖父とばあ
橋をを新く埋ぬ甲をそそ
そそ草ハミミ山花子のまきく
人のうらやまのる 蠅
をうくと砂浜のうくそそ流
之新をくりおをそそくろむ
まき草の遠の中をそそり鶺鴒
そそくそくる葱の坊くそ
一足の草鞋と腰よ繋この坂
峯吹くく穴 名月乃 歌

屋 朗 齋 有 秀 屋 朗 奇 有 秀 屋 朗

約中もいふくは雨とぬるり
 あらたきとくふ秋の人、こ
 虹の根のさうりむり枝の末
 はをうくるおも居るなり
 龍蹄をこくおもたきくる大雲
 年り、中、うんを居るし
 是福尔そぬる花をさハ思も
 ふたりの橋を結むむすく

秀 有 朗 屋 秀 有 奇

平齋八
士朗七

此七初上六

珉屋七
 野秀七
 竹有七

居こはまて、涼き月の影
 多きくるるそ、あ、あ
 舟い、くのやそ、まゆ、ハ、ま、藤
 瑞山のさりのかわる、お、ふ、
 遅く、又、葉、うり、芽、うり、田、想、う
 うく、と、お、す、を、さ、と、鳴、す、お、く

士朗 珉屋 大蘇 五道 屋 朗

燈火の流るるまき書の
 何ふおそりせぬふ 恙 異
 任別し奈らぬの七重を思ひ
 令歡のまかハもや 燈 月 くり
 捨らばそと 鷗のうつくしと 鳴りあり
 小坂の数をわくこるあいな
 更級の月をせむの古棠うと
 名をとまき 葺をけへ 切也
 あゝす 尔 羽 志 果 くる 秋 の 雲
 馬 尔 夢 を す える 日 の 暮
 むら 西 尔 花 の 枝 の 流 出 て

是 蘇 屋 朗 蘇 屋 朗 道 朗 屋 是 蘇 屋 朗 蘇

此七初上七

すゝせも 向ふゆや け ち
 り 居 尔 た の ん て や ん ち 佐 の 解
 羨 尔 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 世 の 中 ハ ち ち ち ち ち ち 一 具
 そ の ち ち ち 吹 水 五 月 の ち ち ち
 嘆 息 ち ち 荆 の 白 白 の 鼻 ち ち
 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 萬 川 ハ を ち ち ち ち ち ち ち ち
 子 鳥 の 雲 ハ 星 何 ち ち ち ち ち
 母 の 出 を 追 ち ち ち ち ち ち ち
 松 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

是 蘇 屋 朗 蘇 屋 朗 道 朗 屋 是 蘇 屋 朗 蘇

十とをふる右の襦袢の烏帽子折
 秋のけしきの言きこりたり
 浪際また木もいくのみをつじ
 都の事いをいひあやハなく
 かくと包う付たさ望のぬ
 風ふ吹く波を流を葉子とる
 玉の咲山をよふとる定明く
 玉露を授ふやうにうけみ

屋 朗 道 蘓 屋 朗 蘓 道

士朗九
 珉屋九

七初上八

大蘇九
 五道九

下、京や摺袢尔はくわふひま
 ちる清のふる涼風新し月
 幾人も晴を曇ふあつり夕星
 土まきやうぬあそとてハな
 ちるちると柳の家此をま
 蛤う里をくふもよひこむ
 春あふるあふりまら大井川

野秀
 大蘓

信濃音のまろくく 之味線
河の沖り壁をほくふし
聖のよけし糸髪を結ハセら
あふちすの種のはきまふま
楳の枝のさける 大由ま
船の月うとくく しくも晴のま
なまの結の結をて 波のよせある
はゆとつる者の涙とち折つ
谷のさる王ハ飯もくく せま
城鳥尔まぬへら せなる恋をて
久米路の楳のさくハまのりハ

紙七初上九

又、ちり糸災ふまろ 小山 伏
妻うく 笛を口ふひい
合歡の束のゆる中より 絡緯の声
まはうつらきあは川の 雲
天より 地ち糸糸の 五尺あて
あひくく 雨ふとすを 張
糸をく 地清めて 糸や糸糸
糸月糸糸くく 糸糸糸 糸糸
糸糸糸糸糸糸の 糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

甲斐の裾野の足る枯風
空のふゆ烟るる若たけし
身を繫ぎて夢をみるも
衣くまきけき浄の世目も都
極よく掃けハまね松葉を
海苔あつる春の御屋の松花
里所之やふくし串貝

野秀一

大蘇世五

批七初上十

日ハゆる月ハゆる雪ハゆる
縮あく岨ハ紀に之を板
二人中々すは不の世はね来
之方おほきなり熟雪の酒
城をよの暖か風ハ雪ハ雪
のき福祿うちをこぼむ夕暮
喜柳ハゆるをむね枝ありや
雪ううあけを雪吹雪うう
里子女子ハ新荷ハ妙南屋
右も左もす掃の

珉屋

士朗

野秀

大蘇

五道

湖風

槎雀

春月

菰

秀

四五元くりも子之とをまは
きのふ見ん一萩の玉川若たうま
朝日影の竹を強むる葉あし
常りの心うとすもそ何の世ある
人を味ませあしき乃若
二事ハ心ふをききとほあは
清き流きおらうらる山形

蘇道朗 蘇道朗 蘇道朗

士朗 十二

五道 十二

大蘇 十二

批七次初上十四

日夕終るや木兔の耳は動く時
おまうきさきのふり物ふはり
魚うまの入来る門ふれうけ
醉人三人やる方もある
存ふか月あかりたる梅の玉
里は溝川さし柳す
ありぬまのう人東胡城を控
扇のまよふ菊ひあけ
ちらくと風の灯の動く

槎雀 湖風 平奇 大蘇 士朗 野秀 風 崔 蘇

舟の渡路ふりしむる
 抱いりぬ境うきくぐのれとるを
 今朝のいのすふ鳥猫う出の
 月流て又一ト志きり鳴りあき
 阿しき此きをうくふくき
 山鴛鴦ふ若れ眼を忘せたり
 篠折うけけし水乃のせはふ
 ぐあも又も唇をうこうとす
 常きくふありく夜代
 身を捨る雨を差我ふ足てま
 大悲能給るを強むぬの日

齋 秀 朗 雀 風 齋 蘇 素月 秀 風 雀

柳七初上十五

紫陽花のちかき可る墓の面
 丸うあけくさるをたすし
 士仲子う自傍ずる泣の味
 中退るくしり 弟れ夕晴
 本枯尔吹すうさきて雀
 ちきく 義の垣根うくく
 雞向も砂よをめくは陸古
 個ふぬきる眼しし乃 抱
 傾城おむししを流か朝比月
 泣きくくをふ出くく 常 烟
 山をひき粒るまき 考 夢 刈 鏡

蕪 奇 珉屋 月 秀 風 雀 蕪 奇 屋 月

十日あけのうらさな乃日のま
鶏を連るしき居る跡なき
子履能ぬきも鴨川の水
此まはいふふあつたれと記に
そあくさきまあつたのて

秀 風 雀 蕪 奇

槎雀 六

湖風 六

平齋 六

大蘇 六

士朗 二

批七款初上十六

菴能新かきもいへ度とるそ
撫うらうらしき書跡けし口
恍惚しあふ是する鏡の山を
波の中あも目をふくそへり
大勢々根本ほりふ出る朝の月
けくあふやう白くそあ 杖
死の子をお撲るあてつてあ
犬の足ふむ神主の庭
摺るこれをもあ嘆がたきく

湖 風 雀 蕪 奇
月 道 凡 雀
五 道 妻 月 槎 雀

明月もさきかきや露のきぬく
 うるゆもきかたしむる中若
 年のゆく中も花をむしん
 顔のうく水の流をいふもら
 彼の臭きすんらうりをさ
 小娘よ若をうたう夕阿
 春夜のふら中よ月代
 おきかしてはやくとぬくまのよ木
 空の中層はるかかゆらあそ
 ひらくと流をちつら舟の底
 青石ひらくちうく幸ひ

雀月道 雀月道 雀月道 雀月道

秘七歌初上十七

挑灯をうけあたる朝の下
 猿よりあふアラのあもを
 菅笠ふ林の枝をさくさく
 のりくくは穂ををす
 木うくくいのふいぬく後の雨
 みそく使の若ふ若ふぬら
 雲をさくく出さる松のひま
 きさくくさるの露をさくさり
 秋風ふ根のひやの傳もさく
 月夜う泣く月うわくふぬ
 横笛ふゆくがあさきりくは

雀月道 雀月道 雀月道 雀月道

むしちたためい院くのうらぬ
 昔しと誰う増賀の裸身を
 阿しとあまなむら伊勢の川風
 秋ハ軽し不衝不崩山ささく
 菓尔鳴り名も数めうくひ

月 雀 月

湖風九

槎雀九

素月九

五道九

栞七款初上十八

大まふ隈をきき露の對う舟

士朗

舟の舳をさするふりんの音藤介

桂五

雪をふりききたるあのは山小

岳輅

清涼なるをき出たり維の了志

少汝

まをぬの中月の後や朝の山

竹有

押よき木を菊はく九月月

大阜

おろしハを辰をきり初瀬山

圃曉

梅の姿の阿と先をき山後山

徐英

ささくしやゆきものさ栗の谷

石老

夕まゝと暮引まゝと歩けり
 あく山の雲は口はくく山はくく
 杉林や人あもすうらまの蔓
 松風やゆらぐらぐらたる冬の月
 むくまの枝とていせしきふ
 日影うちとちをさやぐらぐら
 草野やてはくくつてはくく
 飯阿ふいしりも辰くは栴の谷
 左の林は杉の事ふさる小倉
 志くくや誰の誰ひー飛簾
 旅人とのの物束の神たさ

帯襟 梅間 硯静 葛井 大蕪 鹿野 五雄 沙鷗 黄山 秋国 粟大

批七初上十九

蕪寺や鳩の糞うる年の草
 菅ふ撥くりんをうをさくくを
 けり杖のより新涼や時を
 ゆり杖や滝よりこの朝にけり
 新をくまよとくや月の満たひよ
 春登ひよせしめてあそとく忘
 六月も二日くくを八月と梅
 うるんま葉を鳩の背火の戸に
 多能梅をくくうあもぬまみなり
 朝妻のけしをゆるき鳩のふ
 うくひまををりやとくたる梅のふ

應訂 麥阿 葛奇 九岳 大商 吐山 湖風 槎雀 柏亭 晝月尾 雀人

十客の車の花内御もあがりなり
 時鳥けり免る掛る之程あり
 夏山の小口は月ハ出ふけり
 静さよもり知る故やりし
 紙枯ふ様々うきうきし初月夜
 紗燈ハ消しりるのつくりは
 那音もよみし砂村をよみし時
 初蝶やあそびひこはう免のふ
 不とよみしをうきうきぬ旅の者
 何となく世はまたなむ紙念
 菴もてハそを世もをりうき

楳葉 松菊 阿城 芳水 月底 可竹 曾洛 茶雷 友鳳 珉屋 賀屋

批七初上竹

五月魚子日糸くふるかいつり
 紫雲種蒸林申中やてあそり夕涼
 秋の日ハみくうきぬ壁のきり
 門ふ回り路のよきとよき世に
 不とよみすくけりたる境うか
 落葉多や山あそきぬ丹波舟
 紙帳初て癒るを世もあそ
 涼葉や嵐のよきる鷲 既 心
 木根の何事もなきて明ふら
 雪ちるやゆきやうきなる雪七羽
 大雪をすくくけたる夕日

餘伴 午風 梁臺 春屋 求已 而后 得芝 卓老 野喬 對我 梅洲

浮舟の舟山志くまを寄よ屋々
 義中の義とちりぬ煤とくむ
 売檣や枿の尻事よ逢う由く
 たりきと夜や舟の檣面雲の風
 杖尾さくらま一際の際うけよ
 買毛のふ出まは雀も鳴り日
 朝風尔居が鳴なりいつのやり
 吹くて水ふるうらうら木葉ふを
 舟も日も山う産あり雲のる
 逢のうま樹ふむ久はちりも
 鴨の鳴り水ふる新さけ枝うか

田江 士精 永赤 竹卧 萬賀 秋磨 蕉角 来く 茂東 秋厓 金陵

批七初上并一

とありりうらうらふらうらうら
 色は紙やまきと掃いあをく
 巻のたをうらまき人よ疎鼓
 畑中まをく月日の性来うか
 むらうらうらまきとの堤うか
 書るふらまきとの路く

棋上 六車 魚毛 平杏 野秀 五道

。 文章

名りや舟中の家のけりら連
 むらうらうら鴨の浮葉ハ朝の檣
 大うらうら一羽鳴りなり閑古香

椿堂 宇洋 卓池

夕三のつらと遊んでる向の池に
 楚の花をいふ十の鹿州鞋
 三日目も丸く足はらうのよ
 鎌倉平電の足はらうのよ
 老ふと云ふゆゑ一ふむらか基の雲
 山はまゝにゆくも松の角
 飯のたのしみはうらな木の子
 くさのつらふと云ふ木の芽は
 飯の花遊むと云ふはらう
 春はさしゆくも蛙の鳴るふ
 月の出る時と云ふはらう

万和
 孔阜
 于常
 李臺
 五未
 雄淵
 棟老
 成義
 三津人
 推已
 秋葉

概七初上廿二

婦らさの海はゆくや花を来
 子月あは人の心なる菴う分
 比と云ふの之れ神は松の老は常
 浮雲をいふ所は首出にらふ子
 浮雲をいふ所は首出にらふ子
 楚の花をいふ十の鹿州鞋
 三日目も丸く足はらうのよ
 鎌倉平電の足はらうのよ
 老ふと云ふゆゑ一ふむらか基の雲
 山はまゝにゆくも松の角
 飯のたのしみはうらな木の子
 くさのつらふと云ふ木の芽は
 飯の花遊むと云ふはらう
 春はさしゆくも蛙の鳴るふ
 月の出る時と云ふはらう

沢彦
 木常
 素壁
 古猿
 篤老
 茂言
 武陵
 玄蛙
 日人
 多女
 完未

名月の出〜河や秋のそよまき
水のふふ又方のうらふふの月
休まてゐるや五の女郎花
やま〜とあては〜 枯うか
る〜 障をよ〜のまのゑ
あ〜り〜お〜り
人まの中あも〜のよ
秋の末のま〜を麻の鳴き
雲川の橋〜わ〜秋の風
川杖や神も〜ぬ〜や
塩釜を〜嵐のま〜る〜

十阿 尺文 鶯亭 李東 道彦 榎堂 兼紀 介亭 曉浦 省我 依昌

枕七勢初上廿三

木〜〜や此夕〜ハ汐も来に
落葉もあぬ木も一本あり木の菴
生〜もあの小庭をぬも木ま
障〜のま〜りた〜河ま
ふ〜の月ま〜は水ま〜
あ風やあも涼や雫の袂のま
不〜あ〜人もあ〜むや烟〜
ま〜ら〜ま〜り〜
葉根〜〜出〜と〜ハ〜ぬまのま
明〜り〜あ〜居のま〜く〜
あ〜ま〜山〜あ〜く〜人のうら

川 砂文 関豊 葛三 喜年 雀鳴 桐栖 蕉雨 春蟻 月居 青梁

松竹やまうく梅影一四月よ
 東有
 鶯ハ竹よ鳴りけし梅影の一夜
 怡亭
 松ふりきふたつ梅の影也け
 良平
 けふと来ては生かぬちもそ
 琴州
 病の来くは文月ハ大事
 雄途
 船うけと月夜の宿をえりき
 月巢
 ぬれ日ハ梅も柳も候りけし
 宇曲

深夢はねぬハ遊をつたえく小舟は遠り
 先杯をさうり入るもまハ舟は意有り

批七歌初井四

月あはれとてはふらへと平高也
 桜鼓鼓と登山月乃 舟をえりきハ
 山と尔来りぬとていぬふすつらん
 いふやうく舟を一赤樹のそとに
 春もぬれちみさる平の酒を携く
 志人へ能たすものハ桃よ春ふあるハ
 舟は飛すてはぬ入つたけりて

櫻桃をこく 権すらしをぬまハ
かんとり 秋白三山一や堂らん 蓮
葉一やいふ花舞

赤岨珉屋書

野秀

平齋

撰

五道

枕七效初上共五

長壽樂序

枇杷大人あ〜七十よを〜いせりゆき
氷室應汀子大人を壽きて小集を
あ〜い〜名は〜守〜長壽樂と夢
らる指長壽樂といふことの名よ〜を
福る子若尾張連漢主年百十三よ
〜て自ら作する長壽樂を法深殿
の〜ゆ〜は〜舞〜ふ〜曲をうなるは
及てハ少少の〜と〜ゆる成年よ
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
志〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

不きこあゝをり大人好々五人不これ
 具の可きと長集ハ物ひひひひひ
 書秋月花又集一ひひひひひ
 糸糸白をうたひひひひひひひひひ
 盡層うううううううううううう
 面白きうう長集ハ長壽集
 長壽集を賞るも壽詞ううううう
 ういほにそ序と書

大壽集

批七款五上一

○報漁辭林

年ほむやううううううううう

桑新又肥る杜杞窓をり

山雀う日雀も帰る木瓜はて

この食をううううううううう

夕月ハ椽の下より出るやうん

二交ううううううううううう

大牛の肥えはしく雲のまきひひ

鏡をほむ賞寺の水

猿演の書う若もかく詩を後て

士朗

鹿野

求巳

棟間

野

汀

間

巳

幾束しるしの橋の封を切
さし竹のまじりし草のまじり
ぐらぐらあまきよなるくも
根ある萩のまじりし草のまじり
まきまき苔のまじりし草のまじり
すく風の吹も吹たり湖の上
そつほくまきよなるくも
一掴りまきよなるくも
その代川田りまきの閑さ

朗野汀間已我汀已間

○踈影横斜

水清浅

批七教五上二

山はゆきまきまきあり梅の下傳ひ
水うたやまきまきつらまの月

旭宇

暗香浮动

月黄昏

よきしやとふ花のうきあらし山流
惟くつらまのまじりし草のまじり

左扇

○蘭省花時

錦帳下

大空又隈るまきまき露のまじり
朝日浅運ふ和ふの浦浪

金陵

廬山雨夜

草庵中

傍に...とて花の

白鶴の眠りの長果有りたる

○茂幹 草類

子 栽 左

任然てか...記竹の林に

晴洗ふ山の井...の水

碧洲

普安長貫

四寸 妻

よりの山若口ひとの記し

杉ハ榊の花よそ有く

為内

一七七款五上三一

あ...の喜のあつらふな

...と種智のあつし

...の山の翁のいひ

...見人 家花

...つりさきさく

杉...も横

月居

白川の橋を渡さハ神さく

翠川

杉...見えてわく山とつ横

玉屑

花...の首の雨

葛井

...今白見えはして横

黄山

小さむきいさむきふ花の葉は
 ちまもとの花さつるも木のちま
 花さくもくは拍子くさつて暮
 江のよまひと位まつ様
 世新やそと名様の四時分
 様よはつと歩りよ花の伏見脇
 毛のありくもも花の曇りふ
 花様むもきより沖の舞う
 三日月や何下と消すも花の山
 ちくぬ人のちくぬく山様
 秋妻の衣よめよ花さく

美乳 梅未 田江 竹衣 仙風 木天 若水 李堂 国水 午心 凡隠

批七款五上五

隅くの暮くありり 山様
 松風よ音さくくのもよとま
 夕の日は年よとまあり花書
 月あせハ松下はりもハ月夜
 袖月をまはく時山も閑なり
 ち化秋よつとくまき一袖月夜
 芝のハさめりくちなりと百の月
 名月や花甲のよまみ 杉 立
 名月ハ葉の指の母ありや
 名月や伊勢の杉むくはるま

脇松 大商 樗坐 桂五 守洋 月底 素剛 椿堂 千阿 雀鳴

名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川
 名月如... 偶由川

桃七夜五正六

秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜
 秋の夜の... 夜夜

聖帶
 尺文
 而名
 友国
 孔阜
 車大
 救国
 乙三
 梅洲
 介真
 木容

月子出さる日城狭控の系枿
 拍とこ紀尾の海中の海の上
 城垣をさすまの月のひらひ
 湖の水の色をかりまの月
 後の月ぬりけこのははらふ
 白露の夜明てもあり後の月
 比良の上と月をせなうう後の月
 おもきくそと都の松をせ種用
 夏の月むらうよるを、あはせたり
 うつろき鹿をくぐり夏の月
 舟の元の垣根、月のとほり外

干當
 年月
 可竹
 大蘇
 米起
 曾洛
 砂文
 卓老
 篤老

和七初五上七

此句湖見山下を疎くう吟して
 通

面を記言うれとを人の中
 初言う様又浮たう 新の下
 をせ言のうけきまては降みけ
 初言れとそりもわちよ牛 松
 けり言希人よ尋る 男 山
 初言の浪ははらう部 名
 志くしをそとてい言の初 外
 何系ううも浮世へはくを言のそと

道彦
 鹿野
 閑樹
 鴨聞
 伴未
 鬼外
 吐月
 三建

傘の下も涼なり庭の雪
 白妙やその影も雪守る雪の中
 雪の松雪も紅葉も月夜水
 敷うにや志つるも雪のそ
 人雪まつ垣板や袖よちる小雪
 大雪よあるやちんてきき敷の家
 毎日の雪みり承るりりりり
 ひろうもりり雪は海山の雪ニツ
 雪の戸やあちりり雪りの大軒
 あちけくい敷の名りよ雪の雪
 海雪寺も雪や松原も雪り雪

米彦
 秋茶
 圃晚
 桐栖
 魯履
 推已
 休六
 北濱
 墨獲
 葛衣
 木甫

批七歌五十六

雪の松や庵へ影をそ月あり
 家も雪よそもつ雪の山あけ
 雪やんて雪うりり雪て月夜水
 人の踏雪とそりりり松の雪
 雪の日よまう雪を雪車ゆき雪
 雪たにぬ雪の雪き残月夜水
 雪の雪とそ雪の月と雪りりり
 世の垢も雪を雪りりり月と雪
 松柱も雪を雪りりり雪の雪
 雪の日よまう雪を雪車ゆき雪
 雪の雪とそ雪の月と雪りりり

沂遊
 素壁
 藤之
 奇閑
 木仙
 羊園
 為同
 秋雀
 藍黛
 鷺洲
 九魯

とんちり踏む雪の小舞
きよや雪の白のむらさ
あはれ道々や春の雪を雪のみ
天をくまると雪の中を透る

柳涯
旭宮
春蟻
大阜

望山月樓上

老母をいよぐたり 松の枝
我朝の松の親をり 志望の松
松葉より人の袂や 此の花
松ハそとく月を梅よりき
曉まで之をさけりり 菴の松

棋間
一草
万笈
少汝
千武

批七款五上

陸あふもくんとハ多松の親
八難有松の位りわのつん也 海
松也よ木のり林の夜間まや
松も庭々居るや松家の嵐山
行幸の木の松のいと松もひりり
あはれまハ多家の松も面か
杉千年 雀百まて松とくりりり
白路もや凡ちとをの松の 歌
鳥のやうよふも松よ春よ菴の松
曙や沈一をいれまりの 景
松のよまはるのよま春のよま今まの景

秋磨
葛三
快豊
守之
春思
啟甫
一左
徐英
金陵
左扇
竹有

枇杷園よみ来樹ありまむか
他叟の子の口せしむし一ねよ
今うハ幸崎武隈のくしき
運ひ花部名の報をうきく
月影の夕かかみ美まひりて
よりはも名経んをとりてあ
風情あるをみん

老くろきものしき
應河

幸未春



批七款再上十

